

「中高連携をとらえた自主教材の開発」

— 筑駒 Picture Dictionary の作成 (1) —

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科

稲岡 信之・加藤 裕司・久保野雅史・熊井 信弘
辻 弘・中村 豊・長谷川和則

「中高連携をとらえた自主教材の開発」

— 筑駒 Picture Dictionary の作成 (1) —

稲岡 信之・加藤 裕司・久保野雅史・熊井 信弘
辻 弘・中村 豊・長谷川和則

1. 中高6年一貫をいかに生かすか

1.1 語彙指導の見直し

本校では中学を卒業すると全員が高校へ上がってくるが、この生徒達と試験を受けて高校から入って来る生徒(40数名)の間には学力差がある。本校の中学を卒業した生徒の英語力の方が低いのである。また、これらの生徒の中には英語に対する興味を失いかけている者もいる。その最も大きな原因は「高校入試」のために勉強してきたか否かであろう。確かに連絡進学者には「入試のため」の勉強という動機付けは成り立たない。それではどうすれば良いのだろうか。

発想を転換してみることにした。入試がないことの「マイナス面」ばかり気にかけるのではなく、「プラスの面」を積極的にさがしていこうというのである。そこで「試験によく出る英語」ではなく、「実際によく使う英語」を中心に教材の自主編成を進めることを思いついたのである。特に英語に入門期の中学生には、実用的な語彙の指導を積極的に行うことによって生徒の表現力の伸長がはかれるのではなかろうか。入試という桎梏がないので学習指導要領にとらわれることなく語彙指導ができるのである。

1.2 貧弱な語彙

筆者(久保野)は1987年の夏休みに10数名の高校生・大学生を「ホームステイと語学研修」のためにアメリカ西海岸に引率して行く機会を得た。アメリカ人家庭での生活の中で生徒達は、英語を使ってコミュニケーションを成立させなければならない。しかし、困ったことになかなか会話が成り立たないのである。その主要な原因は生徒の語彙力の貧弱さであった。ホストファミリーの人々が色々と話しかけてくれても、話題の中心になっている単語の意味がさっぱりわからないのである。

1.2.1 量的な貧弱さ

わが国の英語教育では文法指導を重視する反面、語彙指導を軽視する傾向がある。しかし、どのような語彙をいつ、どのように与えるかという問題は授業を組み立てていく上で避けて通ることのできない重要なものである。中学の教科書に使われている単語の数は学習指導要領による制限もあり約1000語程度であり、そのうち必修語はわずか490語に過ぎないのである

我々は豊富な語彙をコミュニケーション成立のための必須の条件だととらえている。いくら文法指導をうけても、内容を理解したり表現するための適切な単語を知らなければコミュニケーションは可能とはならないのである。

太田垣(1987)は与えるべき語彙数をその指導時期に関して次のような提案をしている。

中学校レベルで2,000~2,500語が導入され、そのうち生徒たちが1,000~1,500語を使用できるようにするような語彙指導を提案したい。導入語数が約1,000に制限されている現状を上記のように改めるべきであると考え理由を以下に挙げることにする。

(1) 英語学習も中級レベルになると、努力した割に成果があがらないと失望を感じ、学習意欲も薄れがちになる。ところが、英語学習が始めたばかりの者にとって、外国語を学習するという経験は目新しいものであるから、次々に新しい単語が理解でき発音できることは何より大きな喜びである。このように、中学生たちの間には折角大きなreadinessがあるというのに、文法が大切であるからという理由で、語彙導入を制限している指導法は効果的とは言えない。

(2) 言語習得の場を想像してみよう。そこでは、周りで数多くの単語が飛び交う。それらの単語は、決して1,000語以内に制限されたりはしていない。そして、それがInputとなる。言語習得者は、その中から何らかの基準で自分に適合している単語から獲得していく。

この事実から判断して、中学校レベルでInputの量をもっと拡大すべきである。ただし、外国語学習の場に純粋な言語習得シーンを再現するのは不可能であるから、わが国の中学校ではInputとして2,000~2,500語にしてはどうか考えるのである。なお、Inputされる2,000~2,500語を中学生に完全にマスターさせるのは負担過重になるであろう。過剰な達成を期待すると英語嫌いを生みやすい。生徒たちには、Inputの約半分である1,000~1,500語をマスターさせることにしよう。どんな1,000~1,500語をマスターするかは、個人の選択にゆだねるべきである。すると、各自バラバラの1,000~1,500語を獲得してしまい收拾がつかなくなると心配させるかもしれない。しかし、初めて出会う幼稚園児たちの間にコミュニケーションが成立しているという事実から、中学生たちは彼らのreadinessに即したほぼ共通する1,000~1,500語をマスターするものと予想される。

(3) 単語を記憶したいと思う意欲の強い中学生には語彙導入を極力抑え、面白くない文法や文型の訓練ばかり行なっておいて、いい加減言語嫌いになりかかっている高校生に急に多量の単語を記憶するよう強要して、英語をやらねばという彼らの気持ちをくじいてしまふ形の現在の語彙教育のシステムはよくない、と私は以前から考えていた。そこで、高校

レベルでの単語学習の負担を軽減する意味でも、中学校レベルでもっと多くの語彙が導入されることが望ましい。そのためには、中学1、2年生あたりでは彼らの rote memory（機械的記憶力）を活用してもっと多くの単語を導入し、中学3年生、高校レベルでは、推理力や合理性にのっとった語彙学習を促進したいものである。

語彙指導を行なう際には、単語を「何語知っているか」という数の問題ではなく、「どのような語を知っているか」という内容の問題も大切な視点である。

1.2.2 語彙の質的問題——内容のいびつさ——

大学生は入学試験のために5,000～6,000もの単語を学ばなければならない、それにもかかわらず、“language use”の面では大学生が高校生をはるかに上回っているとは言い難い。

高校生も大学生も知っている単語の質、つまり身につけた語彙領域にかたよりのあるのである。

今年の夏休みに引率した高校・大学生はそのため、ホストファミリーに日本の家庭生活・学校生活や食べ物等を説明しようと思っても肝心の単語が分からないのである。彼らの語彙には抽象概念を表す難しい単語は入っているながら、生活基本語（特に身近な事物を表す名詞）が大きく欠落し、「いびつ」な形になっているのである。

それでは、何故日本の生徒達の英語の語彙力は「いびつ」な形で発達してしまうのであろうか。結論は極めて単純である。教師が教室で生徒に提示する語彙に偏りがあるからに他ならない。検定教科書を用いる通常の授業で我々が指導している単語と、実際に英語圏の国の生活で必要不可欠な単語とは異なるものが非常に多く、重複しているものは極めて少ないのである。

それでは欠落している語彙とは具体的にどのようなものなのだろうか。松原（1987）では内容語に焦点を当て、どのような語彙を導入するかという観点から教材を再検討している。

表1 英単語調査

次の意味を表す英語を書きなさい。	
(1) かわいい	(11) はさみ
(2) 美しい	(12) 自動販売機
(3) ほほえむ	(13) 半ドア
(4) 好きだ	(14) いたい
(5) 親切的な	(15) かゆい
(6) 不器量な	(16) あくび（をする）
(7) きたない	(17) くしゃみ（をする）
(8) 怒る	(18) 便所
(9) 嫌いだ	(19) お風呂に入る
(10) 不親切的な	(20) 酒を飲む

表2 英単語調査結果及び教科書での扱い

No.	English Words	開隆堂		Hirizon		Everyday		Crown		Total		One World	正答者数 (88名中)
		Prince	Sun.	61	62	61	62	61	62	61	62	62	
1	pretty	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	82
2	beautiful	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	87
3	smile	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	80
	laugh	○	○		○		○	○		○	○		
4	like	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	88
	love	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
5	kind	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	85
6	plain										*		2
	ugly												
7	dirty		○							○		○	11
8	get(be)angry				○		○	○	○	○		○	11
9	dislike												8
	hate											○	
10	unkind											○	3
11	scissors												0
12	vending machine												0
13	open door												7
14	painful									○	○		0
	ache												
15	itchy												0
16	yawn												0
17	sneeze												0
18	rest room												13
	lavatory												
	toilet, etc.												
19	take(have) a bath					◎		◎	◎			◎	14
20	drink	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	17

注：* plain(n)「台地」という意味で使われている。

* drink(vt)「～を飲む」という意味で使われており，(vi)はない。

表1の中で、問題(1)～(5)はプラスイメージの語彙であり、(6)～(10)は(1)～(5)の反対語、あるいは対立語に当たるマイナスイメージの語彙である。また(11)～(20)は、日常生活に密接に関係すると考えられる語である。

この調査を中学校3年生を対象に行って得た結果を、関連語彙の教科書での扱いと共に一覧表にまとめたのが表2である。表2では、左端の欄に表1の調査問題の正答と考えられる語を載せ、次にそれらの語が教科書で扱われているかどうかを61年度版5社、62年度版6社について表示している。表中、◎は文部省の定めた必修語彙を、○は教科書編集者側の選択語彙を、また空欄は、その語がその教科書ではBook 1～Book 3のいずれにおいても扱われていないことを示している。また一番右側の数字は、表1の調査を行った結果である88名中の正答者数である。

表2を見ると、問題(1)～(5)のプライメージの語については必修語彙がほとんどであり、その正答数も他に比べ圧倒的に多いことがわかる。それに比べて(6)～(10)のマイナスイメージの語に関しては、必修語彙は1つもなく、選択語彙としてもほとんど取り上げられていないために正答数も非常に少ない。また(11)～(20)の生活語彙に関しても、取り上げている教科書がほとんどなく、正答数もきわめて少ないのが明らかである。

1.3 「いびつな語彙」の補正

高校生・大学生とのアメリカでの1ヶ月の生活の中で痛感した現在の日本の英語教育における欠落部分を整理し、第2学期の最初の中学1年生の授業で次のように生徒に話してみた。

「英語でコミュニケーションができない大きな原因は次の3点にまとめられる。

1. 人に合っても、「どのようにあいさつをしたら良いのか」がわからずにとまどってしまう。その結果、話のきっかけをつかむことができない。
2. 何かわからないことがあったとしても、どうやって質問したら良いのかわからない。また、自信がない時に確認する方法もわからない。
3. 日常生活で多用すると思われる生活語彙が決定的に不足している。

以上の3点のうちで教科書からでは最も学びにくいのが3番目の項目であろう。1、2に関しては、副教材として用いている『NHKラジオ基礎英語』、『NHKテレビ・ミニ英会話とっさのひとこと』等を活用することによってカバーできるが、3については、市販の特効薬はなさそうである。試しに身のまわりにある物をどの程度英語で言えるかやってみよう。」

以上の様な形で動機付を行って中学1年生の授業で「いびつな語彙」を補正するための語彙指導を開始した。生徒たちは4月に英語を学び始めて以来、「これは英語で何というのだろうか」と思いながら未解決で放置しておいた語が数多くあったに違いない。従って表現欲求を上手く刺激してやることによって、殆んど負担や苦痛を感じさせることなく生徒達を語彙の補正指導にまきこんでいくことが出来たのである。

まず手始めに用いた題材はアメリカで購入して来た次の2冊の幼児書である。

Words A Golden Book (1974) N. Y.

Little Golden Picture Dictionary A Golden Book (1981) N. Y.

こういった幼稚園児あるいはそれ以下の年齢の幼児を対象とした絵辞典は多色刷りで、各ページに絵とそれに対応する単語が印刷されている。絵辞典を用いることによって、日本人ならば幼児でも知っている単語で、当然我々の身のまわりにあるにもかかわらず、英語で何と言って良いのかわからない単語をはっきりあぶり出すことが出来るのである。

以下に絵辞典の実例をあげてみよう。教科書に出ている単語とのオーバーラップが非常に少ないことに驚くはずである。



体育祭・文化祭などの学校行事が行われたあとの授業ではそれらに関する表現を学びたいという欲求が生徒達に出来るので比較的容易に語彙指導を行うことができた。

このような語彙はかなりの量にのぼるので中学1年のレベルでは多量に与えた語彙を「つづりが書ける」ところまで指導するつもりはない。その物を見たら単語を口に出して言えば充分なのである。

従って語彙指導の順序は次のようになろう。

- (1) 生徒が必要を感じ、興味・関心を持っている分野に焦点をあてる。
- (2) その分野の中で身近な事物をピックアップする。
- (3) 指示物に対応する英語を音声で指導し、模倣させる。
- (4) 最終的には綴り字の指導にまでもっていく。

以上に述べた様な教科書等に出て来ない生活語彙は、特別に機会を設けて指導していかない限り習得は困難である。この仮説を実証するために、語彙指導を行っている中学1年生に対して実施した単語テストを、高校2年生にも実施してみた。結果は予測通り高校生の惨敗であった。

単語テスト「英訳しなさい」

- | | |
|---------|-----------|
| 1. とび箱 | 6. のり |
| 2. つなひき | 7. 段ボール |
| 3. けんすい | 8. 水道 |
| 4. 腕立ふせ | 9. ホチキス |
| 5. ペンチ | 10. 鉛筆けずり |

このような事態を放置せず生徒の語彙力のいびつさを補正し、増強していくためには生徒の興味にあわせた自主教材の編集が必要となろう。その前に「いびつな語彙」に関する具体的な検証が必要である。次節では話題をいくつか限定して裏付けを進めていくことにする。

2. 語彙と言語活動

現行の検定教科書を使いながら、言語活動をするを考えてみよう。例えば、中学1年生の入門期において、身の回りの事について英語で話をしようとする時、まず困るのは教科書にのっている語彙が少ないことである。例えば、I have ～ . の文型や、This (That) is my (your) ～ . の文型を練習する際に、よく身の回りにある物について英語で表現してみることが行われる。ところが、生徒は自分の持っている学用品について英語で言おうと思っても、教科書にのっている語彙だけでは自分の言いたい事を十分に表現することができない。また、朝起きてから学校に行くまでの活動に限ってみても、「髪をとかす」や「歯を磨く」などをどう表現するのか、あるいは、朝食の「パン」や「マーガリン」を英語で何と言ったらよいかかわからないので、自分の言いたいことが表現できず、結局のところ教科書に出ている型通りの表現内容になってしまうことが多い。英語で言いたい事はたくさんあるが、語彙が少ないため十分に表現できず、一般的な事

を言うにとどまり、文型の定着はある程度できても、大切な自己表現の芽を摘んでしまうことにもなりかねない。

検定教科書の中にはこの点を考慮し、付録や見返しページ等に絵辞典のような形で語彙をジャンル別にまとめて提示している教科書もある。(New Horizon Book 1) しかしながら、検定教科書では、制限をこえて語彙を提示することができないため、言語活動を活発に行うのに十分な語彙は与えられていないのが実情である。

現行6社の検定教科書を次の観点で調べてみよう。

- ① 学用品
- ② 親族呼称
- ③ 朝どんなものを使うか
- ④ 野菜・穀物類

① 学用品

	C	E	H	O	S	T
book	1	1	1	1	1	1
notebook	1	3	1	1	1	1
pen	1	1	1	1	1	1
pencil	1	1	1	1	1	1
ruler	(1)		(1)	1		1
eraser	(1)	(1)		(1)		1
bookcase	(1)	(1)		(1)	(2)	
pencil case			(1)	(1)		1
triangle	(1)		(1)			(1)
compasses	(1)			(1)		(1)
sharpener			(1)	(1)		(1)
pencilbox						1
ball pen						1
stapler	(1)					
paste	(1)					
protractor						(1)
ink						
textbook	(1)					
plastic	(1)					
rubber	(1)					
pocketknife			(1)			
calculator			(1)			

② 親族呼称

	C	E	H	O	S	T
father	1	1	1	1	1	1
mother	1	1	1	1	1	1
brother	1	1	1	1	1	1
sister	1	1	1	1	1	1
son	2	3	3	3	2	3
daughter	2	3	3	2	2	2
uncle	1	1	1	1	2	2
aunt	1	1	1	1	2	2
grandfather						1
grandmother	1					
nephew						
niece						
cousin			3		2	1

③ 朝どんなものを使うか

	C	E	H	O	S	T
bed	1	1	1	1	1	1
mirror					(2)	(1)
brush						3
toothbrush						
toothpaste						
towel					(2)	
washstand						
sink (名)					(2)	
soap						
shower	(2)					

④ 野菜・穀物類

	C	E	H	O	S	T
carrot			(1)		(1)	(1)
tomato			(1)	1	(1)	(1)
onion			(1)		(1)	(1)
pepper	(3)			3		(1)
potato				2	(1)	3
lettuce			(1)	(2)		
cabbage				2		(1)
cucumber				2		(1)
corn		3		3		
spinach			(1)			3
pea			(1)			
eggplant				2		
pumpkin						(1)
celery						
green pepper						
parsley						
radish						
turnip						

数字は新語扱いの単語が配当されている学年を示す。また () 付数字は、本文以外の見返しや付録等に現れる語で、新語扱いにしていないものである。

どの程度の語彙を導入して言語活動を行うかにもよるが、生徒の自己表現力を培い伸ばすために必要なのに教科書にはのせられていない単語がたくさんあることがわかる。

この欠落部分を補うため、東京学芸大学附属学校(1978)では、「言語活動を活発にするための語彙」をリスト化し、その語彙を使ってどのような言語活動が可能かを提示している。しかしながら、そこでは語彙をリストの形で取り上げただけで、具体的にある単語がどのようなもの(こと)を指すのかについては言及がない。

我々は、本校生徒が英語で自分の言いたいことが十分表現できるように、身近な語彙や表現したい語彙を選定し、Picture Dictionary(以下P. D)の形にまとめることにした。

3. 「筑駒 picture dictionary」へ

3.1 なぜP.D.なのか

絵を使うことの意義について述べる。ある物を言葉で定義することに比して、絵を用いれば視覚に訴えることにより、その物が何であるのかを即座に把握できる。つまり生徒が「見てわかる」ということが、我々のねらいなのである。英語入門期にある生徒への語彙指導におけるP.D.の有用性は非常に高い。

この段階にある生徒には、できれば実物を教室内に持ち込み、それを用いて語彙指導を行いたい、あれもこれもというわけにはいかない。そこで絵を用いることがその代役をはたそうと考えたわけである。

一言で言えば、P.D.が望ましい理由は、絵が実物の代わりをし、いつでも見たい時に見られ、視覚に訴えるところから分かりやすく使いやすい、ということになる。

3.2 既製のP.D.ではなぜ駄目なのか

P.D.の良さをそれほどまでに認めるならば、既製のP.D.がいくらでもあるのだから、その中から最も適したものを選んで使ったらいかがかと思われるかもしれない。それでは駄目なのである。なぜ駄目なのか。我々の考えている所を2つに分けて述べよう。

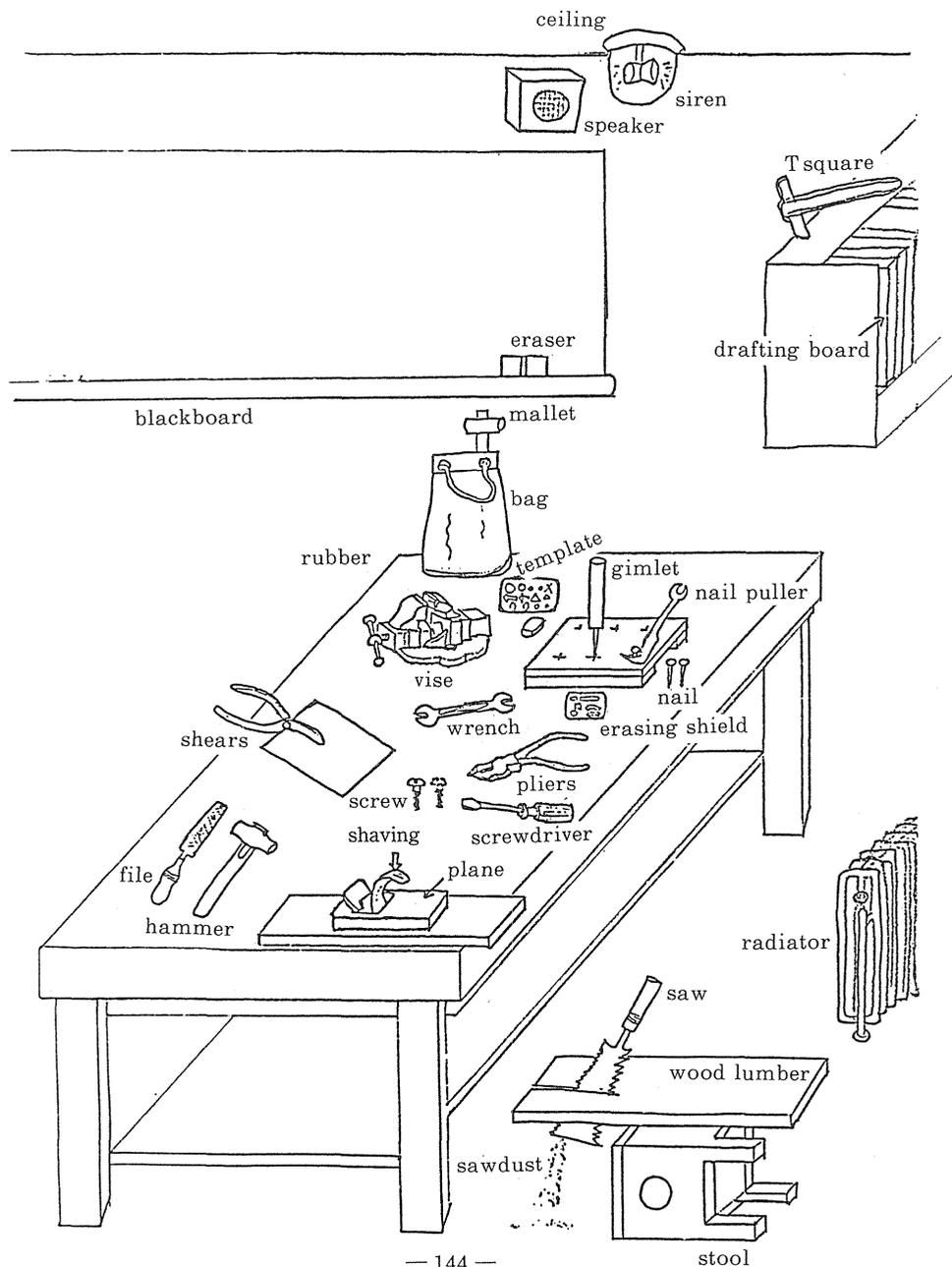
まず第1は、生徒が外でもないこの筑駒の学校生活の中で触れているもの、触れるであろうものを英語で言えるようにさせたい、ということがある。生徒に英語で自己表現させたいと考えたとき、彼らが1日のうちの一番多くの時間を活動に費やす学校生活の中で出会う事柄をどう表現するかの指導が必要である。そこでまずは語彙指導からというわけである。学校では授業があり、様々な行事があることはどこでも同じであろうが、その形式や内容は学校間で異なるものである。筑駒生には実際に自分たちがこの筑駒で経験していることを英語で表現できるように指導したいと考えている。

次に、我々のねらっているP.D.は作成の過程で生徒が参加し、生徒の手により作られるものだ、ということがある。生徒によって語彙が選択され、絵も彼らが描いてゆくのである。もちろん教師側での指導があり、それにのっとってP.D.作成が展開されることは言うまでもない。しかし、基本的には生徒が自ら発言したいという自主性を大切にし、それを育て向上させようとする教師側の姿勢がある。このことは非常に大切なことだと考える。教師が頭ごなしにあれもこれもと押し付けるのでは、生徒はたまったものではない。ときには覚えようとする意欲さえそいでしまう。英語による自己表現へ至る過程は長く厳しいものであるが、「自ら言いたい」という生徒の自主性を大切に、生徒主体のP.D.を作りあげたい。その第一歩を踏み出したわけである。

4. 「筑駒 Picture Dictionary」の作成過程

4.1 作業の過程

今回の絵辞典は入門期での使用を想定しているので、新しく入学してきた中学1年生が共通して体験する用具や教材、教室等の設備を扱うことにした。作業に当たった学年は、入学した頃の記憶が比較的鮮明な中学1年、2年生で、1年生が英語、体育、技術、美術、水田学習を、2年生



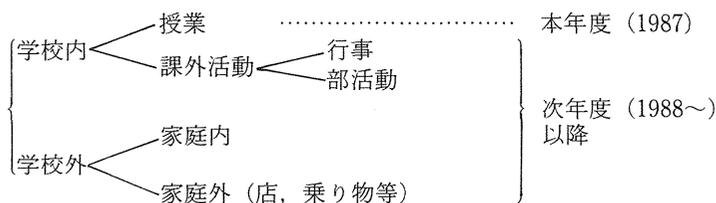
が国語、数学、社会、理科、音楽の項を担当することになった。作業にとりかかったのは10月で、まず、それぞれの学年に割り当てられた項目のうちから、各クラス1ないし2項目を選ばせてクラス毎の担当を決定した。それぞれの項目について使用する教材や用具、教室内の設備等の名称をできる限り挙げさせ、黒板に板書。生徒にその全てをノートさせた後、自薦、他薦で絵を描く係を決定、後日できあがった絵をプリントで配付して各担当のクラス全員に、そこに描かれたものをそれぞれ英語で何というのかを調べさせた。こうして現在、絵辞典が1枚ずつできあがりつつあるが、中には調べても相当する英語のわからないものもあり、また最初の絵には抜け落ちていたものがあったりして、順次追加した。

4.2 作業の問題点と今後の課題

今回の作業では中1は「売れる辞典を作ろう」ということで大いに乗り気であったが、中2は授業にかかわる項目を扱うということもあってかあまり乗り気ではなかった。今後作業を進めてゆく上では、1) 各学年の興味、関心に見合った題材選びをする。2) 既習の文法事項をふまえた表現演習の一環としての作成にあたる。3) できたP.D.の活用方法を十分検討することが必要であるように思われる。

4.3 まとめ

本研究はまだ始まったばかりであり、次に示すように次年度以降に扱う題材もまだ多く残されている。



語彙指導を行うことが本来の目的であったがそのためにP.D.を自主製作していく中でいくつかの副産物を得ることができた。第一に生徒主体で自らの教材を使っていくということが生徒達に与えた自信が予想以上に大きいということである。仮に既製のP.D.を与えても同様の語彙は指導できたかも知れないし、またその方が教材の提示までに要する時間ははるかに少なく済んだであろう。しかし、教材作りを通して発揮されたほどの生徒の創造力・活気・興味等はどうていひき出せなかったのではなかろうか。

第二に語彙項目を全員で英訳して行く作業を通して、生徒に負担感を与えることなく辞書指導(特に和英辞典の指導)が出来たことである。身のまわりで興味をもつ語があったら辞書を引いて調べてみるという自学自習の習慣形成が生徒達の間で着実に進んでいるようである。

REFERENCES

- 今井 邦彦 (1986) 「英語教育をよりよくする為に」 ELEC BULLETIN 1986 Spring
- 太田垣正義 (1987) 「語彙指導の改善」『財団法人 語学教育研究所紀要 第1号』
- 奥田 夏子 (1977) 「語彙指導とは何か」『英語教育』7月号 大修館
- 千種 基弘 (1987) 「異文化理解と語彙指導」『高校英語教育だいろーぐ』No.8 増進堂
- 竹蓋 幸生 (1983) 「日本人の単語力には何が欠けているのか」 The English Journal April
アルク
- 竹蓋 幸生 (1986) 「特集/語彙指導をどうするか」『現代英語教育』9月号 研究社
- 松原 健二 (1987) 「教科書の語彙に現実性を——中学校英語教科書の内容語を考える——」
『英語教育』11月号 大修館
- 「言語活動を活発にするための語彙表現の研究」『東京学芸大学附属学校研究紀要第5集』
(1978年3月)
- 「絵で英語をおぼえよう」『NHKラジオ基礎英語』(1987年5月~1988年3月)
- Elementary Dictionary Longman (1987)
- Photo Dictionary Longman (1987)
- What's What Random House (1981)
- Words A Golden Book (1974)
- Little Golden Picture Dictionary A Golden Book (1981)
- English Words Through Pictures 『絵で学ぶ英単語』 開隆堂 (1975)
- 『カラー図解英語百科辞典 I See All』 学研 (1985)
- 『目で見えるアクション英単語集』 Oxford University Press (1978)
- 『オックスフォード・図解米語辞典』 Oxford University Press (1978)
- 『オックスフォード・図解英和辞典』 Oxford University Press (1978)
- 『イラスト・中学生の英単語』 開隆堂 (1987)
- 『英絵辞典・目から覚える6000単語』 光文社 (1968) 岩田一男著